万葉集「懸け」の事例について

（前篇）

福　沢　武　一

集中には「懸く」が数々用いられています。「懸けて」の形をとる場合が多いのです。

カク（掛・懸）(1)心にかける。「家なる妹をカケテしのひつ」（6歌）(2)言葉にかける。「妹が名にカケたる桜花咲かば」(3265)

これが通解というべきものですが，「心にかける」「言葉にかける」には心情的に共鳴しかねました。次のように考え，得心のいったのは今から30年前のことです。

第6歌の「懸けて」は「心に懸けて」と思ふまい。なにに懸けるかといへば，ひっきりない風の訪れに恋人を「なぞらへた」のだ。（一愛好家の万葉評釈鑑賞に関する覚書き）

おくればせながら第6歌を引きます。

山越しの風を時じみぬる夜おちず家なる妹を懸けてしのひつ

山越す「風」に家郷の「妹」を連想したのです。ちょうど，一語が二つの意味をあわせ持つ「懸け詞」の方式です。それを(1)の稿で多くの例歌によって弁証します。(2)(3)(4)の稿は次の理由で独立させました。本来は(1)の稿の一部だったのです。

……香具山の宮　万代に過ぎむと思へや
天のごとふり放け見つつ　玉だすき懸けてしのはむ　かしこかれども（199　人麿）

この「懸けて」も同じ方式で理解すべきです。香具山の宮に高市皇子その人をなぞられようとしています。それを十全に了解するためには文脈を大幅に検討する必要があります。それを(2)として独立させました。

み越路の雪降る山を越えむ日は留まれるわれを懸けてしのはせ（1786　高橋虫麿歌集）

ここの「雪降る山を越えむ日」は古来問題の多いところです。それで，この一歌だけで(3)の稿をまとめました。実は，この難問とて，本文中の「懸けて」の意味するところを把握することによって容易に氷解するはずです。

……古ゆ今の現に　かくしこそ見る人ごとに懸けて偲はめ（3985　家持）

ここでは「古ゆ今の現に」の意と，「かくしこそ」の具体的内容をつかむ必要に迫られます。ここに(4)の稿は論点をおきますが，「懸けて」がキーワードになっています。

(1)「山越す風」（5，6歌を中心に）

讃岐国安益郡に幸せし時，軍主見山（くすみやま）にて作れる歌

霞立つ長き春日の　暮れにけるわづきも知らずむらぎもの心をいたみ　鶏子鳥うらなげをれば玉襷懸けのよろしく　遠つ神わが大王の　行幸（いでまし）の山越す風の　ひとりをる吾が衣手に　朝夕にかへらひぬれば　大夫と思へる吾も　草枕旅にしあれば　思ひやるたづきを知らに　網の浦の海人処女らが　焼く塩の思ひそ焼くる　吾が下心（5歌）

反歌

山越しの風を時じみ寝る夜おちず家なる妹を懸けて偲ひつ（6歌）

右，日本書紀を検ふるに，讃岐国に幸すことなし。また軍王も未だ詳かにせず。ただし山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく，天皇11年己亥の冬12月己巳の朔の壬午，伊豫の温湯（ゆ）の宮に幸すといへり。一書に，この時に宮の前に二つの樹木あり。この二つの樹に斑鳩・比米二つの鳥さはに集まれり。時に勅して多く稲穂を掛けてこれを養ひたまふ。すなはち作る歌といへり。けだしここより便ち幸ししか。

1

題詞が諸本に「軍王見山」とあって，「軍王（いくさのおほきみ），

山を見て」と訓まれてきました。

「山を見て作れる歌」ならば，「山」が一歌の主題であって当然です。ところが，通解に従えば，「山」は一役さえ果たしていません。ここに疑問をはさんだ古人が二人います。

見山作歌，かくあれど此歌見山よめるに非ず。在旅恋本郷歌也。此端書のしざま，はた疑はし。（橘守部檜杝）

軍王見山の四字は決（うなつ）く誤と見ゆ。さるは此歌に見山と云意の詞なく（山風に催されて家を偲ぶとこそあれ），軍王もおぼつかなきさまの名なればなり。（安藤野雁新考）

昭和23年，山岸徳平教授から書信をいただきました。同年に自費出版した小冊子「一愛好家の万葉評釈鑑賞に関する覚書き」に対する返礼でした。小冊子は5，6歌にふれ，次のように書きました。

山を越えた彼方に故郷があらう。だから山を越す風が恋人の思ひを吹き寄せもする。「山を見る」とは故郷の方を望むのだ。いかにも山は直接の主題ではない。が不可欠の条件をつとめる。

これに対して山岸教授は知恵を授けてくれました。①

「軍王，山を見て」は，実は軍主見山（王は主の誤），今の楠見山にて詠まれた歌（綾歌郡法勲寿村）。山を見て詠んだのではない……。

この高見に導かれて標記のごとく改訓しました。

ところで，主題歌で一番問題なのは「懸けの宜しく」です。この句は評価が正負に別れています。

一首の眼也。（宣長玉の小琴巻一追考）

山越す風が夕暮れに吹いて来ると一層旅情が催されるといふ点に，この歌の中心がある。（総釈武田氏説）

結論を先に申しますが，事実そんなに重要な一句です。それなのに，従来ほとんど軽視されています。心に，あるいは言葉に「掛けるにふさわしく」の意とし，

こは六句をへだてて，下の朝夕爾還比（あさよひにかへらひ）奴礼婆（ぬれば）といふ所へかかる詞（宣長前掲書）

これが通解になっています。これでは一首の眼目にはなりかねます。諸家の批判は次のようです。

かへらひぬればと云にかけたるは語勢を失へる也。（拙解）

かくては「とほつかみわがおほきみのいでましの」といふ三句無用となる如し。（井上氏新考）

決してほめられたものではありません。

百忙の中に「玉だすきかけのよろしく」の一閑句を挿みたるも手柄なり。（正岡子規万葉集を読む）

これは名誉にならぬ賛辞です。

この歌，三句を隔てたる下の還比（かへらひ）にかかるといふこと，如何にぞや聞ゆ。果して其実例ありや否や，おぼつかなきここちす。袖の還らひと云ふを故郷なる家に帰ることとするも強ひたる事のやうに聞ゆ。（アララギ昭和7年11月号品田氏説）

何よりも，袖が翻るのに故郷へ帰るのを言ひ懸けるといふのは無理と思はれるし，集中にさうした例歌は一首もない。（森本氏精粋）

上記の欠をしばらく保留します。春の日暮れ時です。作者は旅先でもの悲しい心になっています。そこへ風が吹き，袖をひるがえすことによって心は痛むばかりです。帰るという点でも一向に期待はできず，ただ言葉の綾として「懸けの宜しく」を使用したにすぎません。いうならば，事実は「宜しく」など全然ないのです。欠陥はもはや致命的に思われます。

緊張に欠けてゐるのであるが，そのやうな欠陥を「技巧の妙味」と「格調美」によって補はうとするみせかけの歌である。（大成(5)石母田氏説）

弾劾がくだされました。しかし，銘記してほしい。それは通解に対する弾劾であって，主題歌そのもののおよそ関知するところではないのです。そのことに気づいたのは例の「一愛好家の批評鑑賞」においてです。その論旨を再述するのが本稿なのです。

誤解して弾劾したものはどういうことになりますか？　万死に値すると思うのです。

2

問題の句について諸説にひと渡りします。

かくるといふ詞は遠きものにいひ，たかきものにいふ詞也。遠つ神といはんとてかけのよろしくとはいふ也。(管見)

君を神とひとつにかけて申すが（かなひて）よろしきと云ふ意也。(代匠記) 括弧内は精撰本の補入

懸乃宜久とは神の冠辞也。(僻案抄)

こは只行幸(いでまし)と云はん序のみなるべし。(拾解)

これらは語法的な誤りを犯しています。「宜しく」は名詞（神・行幸）などには続かないはずです。

宜久は宜しかるてふ辞を約めたるなり。(考)

よろしくましますわが大君といふ心に，久とはいふ也。(燈)

副詞の形になってゐるが意味は大王に冠せてある。(全釈)

いずれも苦しい言いのがれです。

「よろしく」のすぐ下「遠つ神」の「遠」に懸る……。つまり「遠つ神といふこと心に懸けて思っただけでも宜しい遠つ神。それ程結構な遠つ神」と懸るのである。(精粋)

この技法は小手先で，生彩がなさすぎます。

ヨロシキと云はず，ヨロシクとあるのは「吾が大王のいでましの」と下につづいた句法と思はれる。……普通ならば「懸けまくもかしこき」とあるのに注意すべきであらう。(私注)

これも不可解な見解です。「懸けの宜しき」なり「宜しく」なり言表しなければならない必要性がないのです。

天皇の行幸先にいでまし山といふ山ありしによりて「かけのよろしく」と云へるなるべし。(井上氏新考)

空しい臆説として終わります。

懸けのよろしくとは双方をかけていふによろしきなり。宜しとは里言に「ちょうどよい」といふ心にて，後世よき事をいふはたがへり。(燈) 豊田氏新釈・金子氏評釈，同解

宜しくは只善き事を云ふと違ひて，うちあひ相応したる意なり。(古義) 品田氏前掲書，同解

「宜しく」は当然といえば当然です。「懸け」も，双方をかねることに違いありません。相応した二つがあるはずです。なにとなにを懸けあわせてぴったり相応するのか？　問題はその「何々」なのです。

かけのよろしく　連想も宜しく。かへらひぬればにかかる。(全書)

かけのよろしく　「かへらひぬれば」にかかる。「かけ」は何かにかけて，あることを思うことで，連想の意に見た。いまは風の「かへらふ」のにかけて，家に「かへる」ことを思うのである。(佐伯氏評解)

この見解は抜群です。ただ残念なのは，連想に浮かんだ二つのものが通解以上に出ていないことです。主題歌の場合，「風」に「妹」が連想されるのです。

「うら嘆げをれば」までは漠とした嘆きとして歌われています。それに対し，「懸けの宜しく」以下においては，「ひとりをる」「旅にしあれば」云々と，旅先と孤独が前面にとり出されてきます。風が故郷を思わしめ，風が思いをいやが上に掻き立てたことが明白です。

山風の常にかへるかへる袖に吹来って春寒きに，独居人の妹恋しらをます。(考)

その通りです。ただちに次の作品が思いあわされてきます。

み吉野の山の嵐の寒けくにはたや今夜もわがひとり寝む (74)

宇治間山朝風寒し旅にして衣借すべき妹もあらなくに (75　長屋王)

旅先で，寒い風，――ほかでもない，それは家風だったのです。

山を越えて吹き来る風が身にしむにつけて，家なる妹を思ふは当然の事ならんと云ふ意なり。(品田氏前掲書)

とくに山を越えて吹き来たる点に注目していただきたい。楠見山の向こう，すなわち故郷の方角から風は吹いてきます。さればこそ「懸けの宜しく」であったのです。「宜しく」は燈・古義のいう通り，両者がぴったり合致し，一方がそのまま

他方になぞらえられるのです。「宜しく」は「山越す」を修飾しています。②

朝日影にほへる山に照る月の飽かざる君を山越しにおきて（495　田部忌寸櫟子）③

その山を吹き越えたら，離れた人を思わざるをえず，「懸けの宜しく」でなければなりません。

往きて見て来れば恋しき朝香潟山越しに置きてい寝がてぬかも（2698）

家風は日に日に吹けど吾妹子が家言持ちて来る人もなし（4353　天羽郡上丁部鳥）

この二つの歌を合わせたらどうでしょう。山の向こうに妹がいます。風が山を越えて吹いて来るのです。

「山越す風」の一句は重視せねばならぬ。（高田氏鑑賞）

此方へ吹来りて，我故郷を思ふ心をさらに起さしむる。（美夫君志）

その意味において「懸けの宜しく」は一首の眼目そのものでした。（小琴・美夫君志，参照）

このカヘルは，風が故郷のほうへ吹いていくことをいう。この語の使用によって望郷の念をこめてある。（小学館本）

これは方向がまるで正反対になってしまいました。

なお，類想の例歌は少くありません。ここには次の二歌を引用するにとどめます。とくに後例に留意されたい。心理の推移が主題歌と瓜二つです。

まけ長く恋ふる心よ秋風に妹が音聞こゆ紐解きゆかな（2016　人麿歌集）

……立ち待つにわが衣手に　秋風の吹き返へさへば　立ちてゐるたどきを知らに　村胆の心たゆたひ　解き衣の思ひ乱れて　いつしかとわが待つ今夜……（2092）

3

反歌の「懸けて」は「心に懸けて」と通解されています。全書と佐伯氏評解も例外ではありません。実は，ここでこそ「連想して」が選ばれるべきなのに。

いもが家を遠く忍ぶ心にかけてとはいへり。（管見）

ふるさとにをきてこし妹を，はるかにかけてしのばぬ夜はなしとなり。（代匠記初稿本）

遠く離れゐて，ここより彼所へおもひをわたす義也。（僻案抄）④

これらの古注の方が一枚上です。ここにあらぬものへ思向を向けているのですから。も一歩進めて，かなたの「妹」と，ここにある何とがかね合わされているかを把握すべきです。ここにあるものは風です。山を越えて吹いて来る風なのです。このようにして「風」と「妹を偲ふ」とが初めて緊密に統合融和されます。いわば隠微な一語だったばっかりに「懸けて」が理解されなかったのです。それは多くの例歌においても同様です。一歌一歌の「要（かなめ）」をなす一語である点，ゆるがせにすべきでなかったのです。

まそ鏡かけて偲へとまつり出す形見のものを人に示すな（3765　茅上娘子）

「心に懸けて」と通解されています。実は，自分を偲んでもらうために形見を贈ったのです。形見を見，贈った当人を「連想して」ほしかったのです。「形見」のもの「に」，贈者「その人を」なぞらえよ，連想せよ，というのです。「心に懸けて」とは，無神経にもほどがあるというものです。

わが宿に黄葉（もみ）つ鶏冠木（かへるで）見るごとに妹を懸けつつ恋ひぬ日はなし（1623　大伴田村嬢）

ここでも「心に懸けて」が通解。それではちっとも措辞が生きていません。

紅顔を思ひ出で，此紅葉を見せもし，相見たきと両方をかけて恋ふる意也。（童蒙抄）

これは欲が深かすぎました。その前半，紅葉によって紅顔を思い出し，「なぞらえて」だけに限るべきだったのです。

こは妹のうるはしきすがたを恋思ふをかへる手のもみぢの色よきに譬へてよめる也。（考）略解第二説・金子氏評釈・全注釈，同解

いもをかけつつとは，かへでのうるはしきに紅顔を思ひよするをいふ。（代匠記初稿本の一説）

これらを正解者といいたいが，その当人から次の言葉を聞くとは情ない限りです。

紅葉する楓を取りあげただけの効果である。（全注釈）

「たとえて」が適訳でなかったようです。なにかを他のなにかに意識的に懸けもします。自然に，自発的に懸ける場合もあるのです。6歌の「懸けて」なども後者です。意図的にたとえたり，なぞらえたりではないのです。それだけ深いところで二つのものが結合され，まとまった一歌をなすのです。その効果を正当に評価すべきです。

浦回(み)漕ぐ熊野船つきめづらしく懸けて思はぬ月も日もなし（3172）

諸注例外なく「心に懸けて」と解しています。私解します。熊野船に妹を連想する，それが「懸けて」だ，と。

島がくりわが漕ぎくればともしかも大和へのぼる真熊野の船（944　赤人）

そうした船を見るにつけても，大和にいる妻を思いやったのです。

3172歌の一，二句は，

ともかく「めづらし」の譬喩的の序である。（沢瀉氏注釈）

これが通解です。そんな修辞だけの一，二句ではないのです。目の前の具象的な船です。それと，忘れがたい「妹」とをつなぐポイントが「懸けて」なのです。

祝部(はふり)らが斎(いは)ふ三諸のまそ鏡懸けてそ偲ふ逢ふ人ごとに（2981）

ひとえに「心に懸けて」と解されてきました。その時，「逢ふ人ごとに」が宙に浮いてしまいます。逢う人ごとに，私はあなたを連想し，偲んでいます，……このように解すべきです。そのとき，「懸けて」が生き，一歌全体が生きてくるのです。

4

長歌の「懸けの宜しく」に参照すべき一歌があります。

妹が名に懸けのよろしき朝妻の片山ぎしに霞たなびく（1818　人麿歌集）

次の注解がとびきりすばらしい。

愛する妻といふ語の入ってゐる，朝妻山といふので，関連せしめるのに具合のいいといふ意味である。（斎藤氏人麿評釈篇下）

先には「連想する」に敬服しました。これも同じものの一面です。「朝妻」といえば「妹が名」が極めて自然に思いやられる，——それが「懸けの宜しき」なのです。

ところが，斎藤氏はたちまち「唱ふるさへ心地いい」といった平凡な解に満足してしまいます。

関係させて云ふに好い……（窪田氏評釈）

この「云ふ」は人まどわせです。諸注は，名づける・呼びかける・冠せられる，等，「云ふ」の面だけにとどまっています。それでは「懸け」の機能が死んでしまいます。

カクは関連させる，結びつける，の意。

……ノ宜シは，—することが好ましい，の意（小学館本）

最近のヒットです。これでなければならず，引用しないではいられませんでした。「よろしき」をピタリノ・ズバリノと解するならば満点です。それを主題歌にも適用すべきことはいうまでもありません。

なお若干を追録します。

妹といへばなめし畏ししかすがに懸けまくほしき言にはあるかも（2915）

ここの通解も「口に出して言う」。

まともに言ったでは「なめし，畏し」。同じ言うにしても，遠まわしに，なぞらえて，関接的に言う，これが「懸く」。定型化した次のものはまさにこれです。⑤

懸けまくもゆゆしきかも　言はまくもあやに畏き……（199，外）

本義を「言葉にかける」とし，口にする，言う，と同意とする通解は曲がなさすぎます。全く同じ「懸けまく」「言はまく」を重ねたことになるのですから。曲のなかったのは原作ではないのです。

妹が名に懸けたる桜花咲かば常にや恋ひむいや年のはに（3787）

この「妹」は伝説の女主人公桜子です。通解は「名付けている」。

人名と花の名と，一つ「桜」が兼ねています。それがとりもなおさず「懸け」です。懸け詞のそれも同じです。施訳すれば，——妹と同じ名を持っている桜が……。

ここでも注意したい。もはや3787歌に「連想する」は当たりません。「連想される」ならば意が

通じないこともない。ということは，「懸く」の主体が作者から離れたのです。

……音のみも名のみも絶えず　天地のいや遠長く　偲びゆかむみ名に懸かせる　明日香川……(196　人麿)

これも同断です。――皇女がそれと「同じ名を持っておられる」明日香川……。⑥

あまさかる鄙に名かかす　越の中国内(くぬち)ことごと……(4000　家持)

ここでも「名を負う」(名を持つ)が通解です。やがて「名高い」へいってしまいます。「鄙」と「越」の切っても切れない関係を見落としたらおしまいです。「鄙」は「越」，「越」は「鄙」なのです。⑦

秋山をゆめ人懸くな忘れにしその黄葉の思ほゆらくに (2184)

蜻野(あきつの)を人の懸くれば朝蒔きし君が思へて嘆きはやまず (1405)

口に出して言う，これが通解。それにしても，直接「秋山」「蜻野」を話題にするのではありません。それを思い出させるような話しぶりが「懸く」なのです。なにも話には限りません。次を見てください。

ほととぎす懸けつつ君が松蔭に紐解きさくる月近づきぬ (4464　家持)

ほととぎすの鳴き声が「紐解きさくる月」の到来をさきぶれしています。時は3月20日です。気の早いほととぎすが鳴いたのです。

ほととぎすのことを心にかけつつ君が松蔭で……(総釈豊田氏説)

ほととぎすの生彩のなさに我慢ができません。その鳴き声を耳にし，五月の到来を実感したのです。「懸けつつ」は一歌のポイントです。これによって「君が」以下の期待が躍動してくるのです。

紫草(むらさき)の根はふ横野の春野には君を懸けつつ鶯鳴くも (1825)

君を懸けつつとは鶯の声を聞きて人の声をも思ひ出て，又もろともにきかばやとも思へばなり。(代匠記精撰本)

前半はいずれの説よりも立ちまさっています。鶯の声が君その人を連想させたのです。鶯はなにも意識していません。第三者からいえば，作者の人恋しい思いが鶯の声を恋人その人に関係づけて聞いたのです。自然にそう聞こえてきたのです。⑧

5

そろそろ主題歌の「懸け」に完結を求めます。のこる数首の例歌は後篇で考察することにします。それらも異種のものではないのです。

「懸く」の本義は「二つのものを兼ね合わす」ことです。たとえば同名から初まって，なんらかの意味で連関が認められるまで，かなりな幅が生じます。

一方，「懸く」は主体の相違によっても語義がゆれます。当事者が意識して関連ずけ，連想し，関説する場合があります。当事者は意識しないのに，第三者がそのように見なし，聞きなし，思いなす場合が多出します。純客観的に連関の認められる場合だって存在します。主題歌の場合，

懸けの宜しく　純客観的

風と家郷の妹とは自然的に結合しました。二つはピタリと一つになったのです。「妹風」というべきでした。

懸けて偲ひつ　意識的

家にいる妹を「偲ふ」(思いやる)とき，妹を風に「連関させている」点，意識的です。意図的ではなく，むしろ多分に自発的です。無意識ではないのです。

いずれにせよ，表現そのものは特別難解なものではありません。一語の本義を忘れた後人が難解なものにしただけです。

長歌はかなり複雑な技巧を用いている……。(佐伯氏評解)

「懸けの宜しく」を中心に述べているのですが，それは複雑でもなければ，ことさら技巧と呼ぶほどのこともありません。

風のかへり吹くにも一層家に帰りたさの思ひがまさる……。(左千夫新釈)

風の「かへらひ」に，家へ「帰る」をかけた通説に立っています。実は，「帰心」ではなくて，「妻恋ひ」が長短二歌の主題なのです。二つの「懸け」は主題への導火線です。もっと正しくは，発火点です。その意味で二歌の眼目だったのです。

第二段（「玉襷」から「かへらひぬれば」まで）は腹部に当り，情景いづれにしても十分にその所思を展開伸張すべきであるのに，僅に前段に次ぐ事実の推移経行を叙するのみに止まったのは，少し変体である。（金子氏評釈）

「懸けの宜しく」を正解しなかったため，第二段の情念をうかがいえず，しかも原作を難ずるに至っては何をかいわんやです。一歌は第二段の妻恋いにおいてせり上がっています。

長歌では，僅に帰ることを口にかけるだけでも好ましいと云っただけで，作者の憂鬱の因る所を明かにしてゐないが，この反歌に至っては，家なる妹をかけて慕びつと明言してゐる。（総釈武田氏説）同氏全注釈，同文

全然わかっていないのですね。長歌は憂愁のよって来たるところを明らかにしています。それは「山越す風」です。なにも露骨に「明言」するばかりが能ではないのです。

高山よりおろす風は，殊に身につよくしむものなり。然れば山越としも云る也。心をつくべし。（墨縄）

激しい風が山を越して吹下して来る，さうして自分の袖を翻して吹く。すると時候外れに寒いし，且心理的には淋しいし，そこで愈愈故郷を恋ひ慕ふ気が抑へ切れず湧き立って来る，（精粋）

その風は，激しい，寒い，心理的に淋しい，それで懐郷心がつのる，――それだけじゃない。風がただちに家郷の妻そのものをクローズアップさせるのです。

この歌の眼目は，題詞にも看る如く，「山を見て作れる歌」である故に，「行幸の山越す風」の一句は重要視せねばならぬ。（高田氏鑑賞）

「山を見て」ではなかったし，それが眼目でもありませんが，「山越す風」の一句は絶対重視しなければなりません。

題詞に「山を見て作れる」とあるが，歌そのものにあっては「山」は一部で，中心的なものではない。自然である山に寄せたかの如き題詞の添へ方も，強ひて文芸的のものとしようと意図した跡が見える。（窪田氏評釈）

誤解の上に立った立論は聞き捨てがなりません。次のような大家の発言は末恐ろしくさえなります。

題詞そのものに二つの不審がある。一つは，この作は行幸の供奉の折のものでなくして，その昔の行幸の遺跡になってゐる山の麓に坐しての作とも考へられる事であり，も一つは「見山」とあるが，内容は山を見る作でない事である。しかもこの長歌の中心と短歌の劈頭とに山を越す風が詠まれてゐる為に，山が主題の作のやうにふと思ひあやまられ，その山の上には行幸の文字がありなどして，この作の資料本にはただ讃岐安益郡にありて軍王の作る歌とのみあったのが，後に今見る如き題詞のやうなさかしらが加へられ，それによって更に左注が加へられるに至ったものと考へられるがどうであらうか。（沢瀉氏注釈）

6

最後に批評と鑑賞にふれます。

まず長歌に表現の稚拙さが指摘されています。類評の中から代表を一つ掲げます。

枕詞と序詞の濫用が，余りに煩冗な感を与へる。……且「我」といふ語が五つもあるのは，多くは不用意の重複で，洗練を欠くことも甚しい。（金子氏評釈）

枕詞や序詞の多用，「我」の反復は感心できません。ただし，単純簡明なものばかりです。

各節の転換に「卜嘆げをれば」「還らひぬれば」「旅にしあれば」と，何時も同態の接続法を用ゐたが為に，潔浄を欠き辞様に変化乏しく平板に堕してゐる。（同上書）

これもほめたことではありません。これを要するに，表現の稚拙さは決定的です。

対句を使用しないのは，文筆作品たる傾向を強くする。前出の長歌に比して，滑らかさにおいて劣ってゐるのは，知識者の文筆に依る創作であるからである。（全注釈）

対句の快的なリズムに乗っていません。より散文的です。それを負の方向に評価すまいと考えます。自らの地声で悲懐を叙しています。リズムに流れなかったのです。いうならば非リズム的リズ

ムです。枕詞の集中した前半は，しばしば間を置いた，訥々たる口調です。後半は枕詞も姿を消し，実質だけ投げ出してきます。それが無意識の，唯一の技巧です。

全篇一文から成り，順序を守って進行するが如き叙述法を取ってゐる。（全注釈）

まさにその通りです。それとない憂愁に始まり，風に触発されて妻恋いが点火され，燃えさかってゆき，やり場のないふすぶりを続けます。

歌調もこれに照応しています。訥々と語り出され，点火と共に，もはや一途に歌いあげられていきます。「網の浦の……」は修辞過多が気になりますが，せり上がった調べの抑えとしての役目を果たしているのです。

かく粗笨な所に又，その真実味と素朴な古風とを斟酌し得るので，なまじひに修辞の巧に堕して，真摯な情の籠らぬ娼婦の態でないのが喜ばしい。（金子氏評釈）

然りです。技巧が鼻につくことがありません。あら削りで，いかにも男性的です。文弱に流れる前の「男」がここにいます。

強烈な旅愁，故郷の愛妻に対する抑へ難い思慕の情が，冒頭から結尾まで直線的に，一本調子に，力強く詠はれてゐる。腕曲さも繊麗さもないが，そこがこの歌の価値である。（全釈）

これまた然りです。平板ではありません。緩急をえていて，必ずしも一本調子ではないのです。短簡な枕詞も歌調に効果的です。もはや稚拙といってばかりいられません。

注目してください。一歌の情意はなまです。自然な吐息です。これにくらべれば，人麿はひどい技巧家です。人麿は全力的だ，と，諸家が称賛します。それは自然な人間性をおし殺した，人為的なものです。みせかけです。むしろ主題歌に全力を感じます。情意が脈々と生きているのです。

以上の批評はそのまま反歌に移すべきです。

長歌の意を纒めて強く述べたものだ。古朴の歌風である。（全釈）

素朴のうちにこの婉曲味をもった措辞は頗る自然で，決して求めて成ったのではない。郷愁に神経過敏になった作者が愛妻を思ふ情味を，太い線で力強く表現してゐる。（金子氏評釈）

この歌は，何か古調のやうに聞こえる。それから，鏡王女などの歌に較べるに，滑でなくて堅く粗いやうに聞こえる。そして気息が大きく長いやうなもので，古調として受納れられるのは一つはその点にあるのかも知れない。（万葉集研究（上）斎藤茂吉氏評）同氏歌境，同文

ほぼこのようなのが通念です。悪びれないで，慕情をまともに歌いあげています。文弱に染まらない素朴なよさがあります。語句は緊密です。「懸けて」が全体の紐帯になっています。

なおふれ残した評言の目ぼしいところを引きます。賛同しかねる意味で印象にのこったところに限ります。

此歌の口調，人麻呂よりは遙におくれて，寧楽もやや末つ比のすがたなり。（墨縄）

この作品年代は，少くとも斉明天皇紀の温泉幸以後に引下げなければならない。（都築氏十三人）

これらは主題歌の息吹きを見誤っています。甘美な歌調に毒される前のものなのです。

上品な旅愁の歌であり，基底に漂う感傷性はかくすべくもないと思う。反歌もまことに反歌らしく整っており，第二期以後の風を帯びているとさえ言えそうである。（田辺氏初期万葉）

気分を主にした，細かく柔かい風を持ったものである。……かうした気分を長歌の形式をもって作ってゐるものは，寧楽期に入っての作も含んでゐる民謡集である巻十三があるのみで，他には例のないものである。（窪田氏評釈）

旅愁が主題です。感傷的になるのは必然です。それをまともに，粗野ともいえる調べに託しています。これはおよそ後代風ではありません。

感動も緊密でなく，緊張に欠けてゐるのであるが，そのやうな欠陥を「技巧の妙味」と「格調美」によって補はうとするみせかけの歌である。（大成(5)石母田氏説）[9]

本稿の第一項の同文を再度引くことになりました。一番不評を買った「懸けの宜しく」を誤解から開放した今は一歌の評価も改定してもらえるか

と思います。枕詞の多いことを認めます。「網の浦の……」の形式化も認めます。しかし，とくに技巧的ではありません。「格調美」どころか，朴訥で，粗野です。いくらなんでも「みせかけ」はひどすぎます。

形式・技巧を偏重する頽廃が，献上歌のみでなく，一般に強い傾向としてすでに出発点から存在してゐた……。（同上書）

詩歌の原点に立つならば，主題歌は右の批判を甘受しないわけにいきません。無技巧的だとはいえ，枕詞の多用と，五七調に固定してしまったことに徴せられます。ただし，それを貫いて荒々しく叫ばれている真情を見逃したらおしまいです。

も一つ別種な批判がなされています。

歌の内容情趣に個人的性質の感銘が稀薄である。……哀しみ，寂しみの中にも甘美なものの有る事を否定し得ない点からでもある。其辺が一般的情緒に富むといふにあった。（万葉集研究（上）鹿児島氏説）

はっきり作者の態度即ち個性を捕捉する事は困難を感ずる……。（同書松井氏説）

内容・技方は単純・朴訥であって，何処か伝承的一般性の色合が濃く，作者の気息の稀薄を感ぜしめ，……親しみやすい哀韻があっても，力が弱い……。（同書神田氏説）

一般性にとどまる哀感を異口同音に指摘しています。そうでないことを本稿は論述したつもりです。念のため適評を一つ引いてとじめとしたいと思います。

心の内部の憂悶といったものを吐き出すに急なのである。吶々と渋りがちに，稚拙に，かきくどくように訴えている。実に個人本位の作品で，ほしいままに独詠してはばからない。（坪野氏秀歌）

追　考

長歌の「還らひ」は語釈で説がわかれています。それが気にならないではありませんでした。最近，次のような新説が示されるに及んで，もうほっておけなくなりました。最初から検討しなおす必要に迫られます。

このカヘルは，風が故郷のほうへ吹いていくことをいう。この語の使用によって望郷の念をこめてある。（小学館本）

朝夕吹き返って行くものだから（新潮社集成本）

この見解は誤認された「懸けのよろしく」から導かれたのです。もはや本論で結論が出ているので端的に申します。カヘルも古い注に立ち返るべきです。その弁証を追記の形で粗述します。

1

故郷こひしくながめをるに，そなたより吹き来る風の，わが袖にふれて，過ぐるかとおもへば，又吹きて，いとど物おもひをもよほして，わするるまもあらせず，なやますをいふなり。袖を吹き返すにはあらず。（代匠記初稿本）同精撰本・考・古義・美夫君志・左千夫新釈・豊田氏新釈・金子氏評釈・菊池氏精考，同解

カヘルは反復することを意味します。例証を一つだけ引きます。

ぬばたまの夜を長みかもわが背子が夢に夢にし見えかへるらむ（2890）

ここでは接尾語化していますが，もともと主題歌のカヘルと同じです。それを無視し，とって代った通説は，代匠記が口を極めてしりぞけた見解なのです。

山をふき越ゆる風に我袖の朝夕にひるがへれば……（井上氏新考）注疏・峰岸氏口訳，同解

風が袖を翻して吹く（全釈）

風が吹き来って衣手に触れて翻る（武田氏総釈・新解・全注釈）

風の衣手に，かへらふ，――この語脈のままには理解がいきかねて，次のようにとりなしています。

風が衣を吹きかへすをば，風自身がひるがへる体によみなしたる詞なり。（山田氏講義）佐々木氏評釈・窪田氏評釈，同説

上代人は，袖は勿論カヘルのであるが，風もまた袖と共にカヘルと考へられたと見るべきであらう。（沢瀉氏注釈）

これを聞けば，そうなのかな，と思います。カケノヨロシク（口に出して言うのもうれしいことに）とある限り，「しばしば吹く」ではならなかったのです。せめて「還る」の語音を保存することが不可欠でした。語音だけでは満足できず，「還る」の語義まで前進したのが最初に掲げた新説だったのです。「懸け」の誤認がわざわいだったことは先に一言しました。

2

天地の分れし時ゆ　ひさかたの天の印と　定めてし天の河原に　あらたまの月かさなりて　妹に逢ふ時さもらふと　立ち待つにわが衣手に　秋風の吹反者（ふきかへらへば）　立ちて居てたどきを知らに　むら肝の心さまよひ　解き衣の思ひ乱れて　いつしかとわが待つ今夜　この川の行きて長くも　ありこせぬかも（2092）

ここにも主題歌と同じ語脈が使われています。——衣手に，秋風の，吹きかへらふ。……諸注を一覧すると，「吹きかへる」は次のようです。

(1)絶えず吹く，しきりに吹く　古義・総釈安藤氏説・峰岸氏口訳・佐々木氏評釈・大系・小学館本

(2)翻る　全注釈・窪田氏評釈

(3)吹きかえる　折口氏口訳・私注

(4)しきりに吹きかえる　沢瀉氏注釈

(3)は直訳で，意を汲みかねます。(2)の意なのでしょうか。(4)は(1)(2)の混合です。(2)「翻る」のくされ縁を捨てて，(1)の正道に立ちましょう。

幾度も幾度も袖に風の吹来るを云。袖を吹翻すと云にはあらず。（古義）

主題歌と全く一つです。

なお，次田氏に異説があります。在来の説を否定した上で唱えられています。

卑見を以てすれば，海岸に近い処では午前と午後とで風の吹く方向が反対になるから，それを「還らひ」と言ったのであり，「吾が衣手に」と歌ったのは，袖は風に殊に翻り易いからである。（同氏改修新講）評説，同解

カヘラヒの語義からしても，袖の動きにしても，苦しい立論です。

3

カヘラは反復，ヒは継続を意味します。「風が袖にひっきりないので」の文意です。

一方，反歌の「時じみ」を「絶えず」と私解します。別解は「時ならず」です。それが当たらない端的な証左を示しましょう。それは，長歌の「朝夕にかへらひぬれば」と矛盾撞着することです。ひっきりない風が長反両歌において家郷の吾妻を思い出させています。「懸け」の一語がキーポイントである点も共通です。「風」と「妹」とをぴたりと結びつけているのです。

我越来りし，故郷の方の山より吹こす風の，我袖をふきて過るかと思へば又吹来て，我古郷を思ふ心を興しぬれば……。（代匠記精撰本）

それは楠見山で，「我越来し」はともかくも，故郷の方角に当たり，その山麓に宿ったことが察せられます。

山を越えて来る風がわが独りをる衣の袖に朝夕に故郷の方からかよって来れば……。（豊田氏新釈）

これでなければなりません。本稿の冒頭に掲げた新説は方向が正反対になっています。

最後に「朝夕」について一言します。

朝はつけたりで，単に夕方にといふ意。夕に主眼がある。（総釈武田氏説）金子氏評釈，同解

「朝」を邪見にしてはなりますまい。風のひっきりなかったのは，歌われている時点に至るまでの「朝夕」だったのです。それが「かへらひぬれば」の「ぬれ」に表現されています。それは反歌の「夜おちず」とも関連します。滞在がすでに幾日幾夜にわたっていたのです。

注

① その後，山岸教授の次の一文によって所説を再確認しました。詳細は拙著省察(1)を参照ください。

安益郡に行幸の折に，軍主見山，即ち今日の法勲寿村の楠見山で，お供の人が詠んだ「霞立つ長き春日の」の歌……（「古代の文学」前期）

② 「遠つ神」以下「いでましの」までは「山」を修飾します。「山越す」のは，もちろん「風」です。「こす」の訓は西本願寺本・代匠記・古義を経て現代に及びました。

③ 未刊「省察」(2)のその稿に譲ります。

④ この線上にあるのは，——僻案抄・考・略解・墨縄・檜杁・目安補正・安藤野雁など。現代では菊池氏精考が同説を保留しています。

⑤ 別稿の199・3324歌を初めとして，475・478・813・948歌などなど。

⑥ 「偲ひゆかむみ名」は切れません。切ったら血が出ます。そんなむごいことをしたのは，——略解・折口氏口訳・新講・武田氏（新解・全訳・全注釈）・沢瀉氏新釈・斎藤氏人麿評釈篇・窪田氏評釈…。

⑦ 「名高い」と解した面々は次のようです。——代匠記・全釈・新解・大系本。

も一つ，次のものは曲訓とでもよぶべきものです。

名輝（ナカカ）ス　略解・折口氏口訳。

⑧ 梅が枝にきゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪はふりつつ（古今集　5歌）

通解は，冬から春にかけて。

まだ雪がふっていて冬のけはいです。だのに鶯の鳴き声は春を思わせ，春をなぞらえています。右のことを佐伯氏が言い当てています。それは，

鳴き声に春をかけて鳴くけれども。春だ春だと言っているように鳴くけれども。（古典文学大系「古今集」頭注）

⑨ 石母田氏は第3歌を徹底的に批判しました。それについては本紀要の前号で再批判しました。

石母田氏は同じ調子で主題歌の批判を付記しました。

一方，石母田氏の尻馬に乗ったのは清水克彦氏で，第3歌と主題歌を詳しく批判しています。ここには主題歌評を引用し，私見を加えます。

日本古典文学大系の万葉集で，

山越しに吹いて来る風が絶えないので（袖がいつもひるがえり），家に帰ることばかり思われて，云々（傍点筆者）

と解しているが，もっとも作者の心情に迫った解釈ではないかと思うのだが，そうだとすれば，作者はこの反歌において，長歌における右の部分の意味をふまえ，反復し，強調している事になる。作者自身，この技巧的，機智的な表現の達成に得意だったもののようである。（同氏万葉論集22—3ペ）

これは誤解にもとずく邪推です。身に覚えのないことまで数え立てられては作品も作者もたまったものではありません。

七句へだてて「かへらひ」に掛け，「かへらひ」を掛詞とする表現は，作者自身，この技巧的，機智的な表現の達成を得意がっているようだが，ここではその技巧性や機智性のみが強く迫って，望郷の愁いは背後へ沈んでしまう。……これらの表現は，一首の主眼とする感情を明確にし，強調する為に役立っていないのみならず，かえってそれを不明確にしてしまっている。（同書23—4ペ）

引用が長びくのでやめます。要するに，清水氏は結論します。——主題歌は失敗作だ。失敗故に歌謡から独立し，高次の作品への出発だった。「このような形式や技巧の中に，それにふさわしい精神が盛られた時期」，——それは古今集の時代だとのこと。（同書25ペ参照）

ついに傍白せずにはいられません。——この人は万葉の真髄がなにであるかがちっともわかっていないのだな。